

令和8年2月18日

第57回日本PTA関東ブロック研究大会ながの大会
特別企画部 事業報告書

1、事業名

第57回日本PTA関東ブロック研究大会ながの大会 特別企画事業

2、事業目的

大会スローガン・メインテーマの実現を図る。

- ・単位PTAと児童生徒の相互理解による各事業の充実化を図る。（関東ブロック内）
- ・児童生徒のつながりによる出会いと学び・気づきの提供。（関東ブロック内）
- ・子どもたちと一緒にウェルビーイングの実現に寄与する。
- ・笑顔で子どもたちと一緒に地域の未来を考える機会を創出。
- ・「こどもまんなか」の通年事業の模索。
- ・オール信州で「こどもまんなか」の事業の実施。（長野県内独自目標）

3、特別企画部 構成員

熊谷弘（部長）

吉澤多恵子さん（北信）

小林俊子さん（北信）

竹内由貴さん（東信）

宮原純平さん（東信）

加藤慎介さん（中信）

川北郁雄さん（中信）

永井由起子さん（南信）

栗塚夕華さん（南信）

宮川浩アドバイザー

4、事業内容

(1) ウェルビーイング実現プログラム「相互理解カード」の実施

目的：本大会においてスローガンは「結（ゆい）笑顔で未来をつくる子どもたちと一緒にウェルビーイングの実現を信州から」です。子どもたちの為に真剣に向き合うPTAが、さらにその意義を深めていくために、まず子どもたちに耳を傾け、「知る」ことから「理解」する。そこには沢山の気づき・感動・学びがあると信じています。そして、その経験から、さらに充実したPTA活動として進化していくことを目的とします。

また、参加された児童生徒にとっても、同世代の出会いや単Pの役員の方々の皆さんなどの「素敵な大人」との出会いで、当事者意識が芽生え、沢山の学びを得ることを願っています。

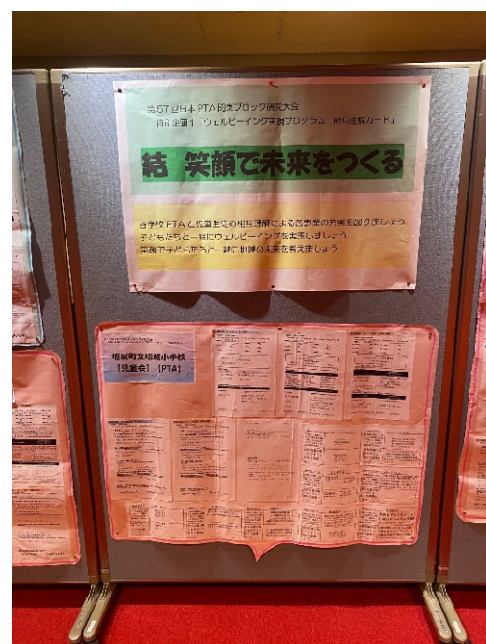
実施期間：令和7年6月～9月末まで

実施方法：

- ① PTA 会長はじめ役員の方々に「相互理解カード」の実施を検討、又は児童会・生徒会等の担当教職員の皆さまから子どもたちに「相互理解カード」の実施の検討を図っていただく。
- ② 実施が決まりましたら、PTA 役員又は児童会・生徒会等の担当教職員の皆さまから、特別企画のチラシ又は下記の実施登録よりエントリーをしていただく。
- ③ エントリー後に表示される画面より「相互理解カード」がダウンロードしていただく。
- ④ 「相互理解カード」は1回目「PTA 用」「児童生徒用」、2回目「PTA 用」「児童生徒用」と計4枚あり、まずは1回目をそれぞれ実施し、双方で交換をしてから、2回目に進んでいただく。
- ⑤ 2回目の記入が完了しましたら、PTA 役員又は児童会・生徒会等の担当教職員の皆さまは児童生徒分も集めて頂き、県P事務局に FAX 又はメールで送っていただく。
- ⑥ 2回目の「相互理解カード」も双方で交換し合って更に理解を深めていただく。

総合理解カード提出校

- ・四賀小学校 4 枚
- ・原小学校 12 枚
- ・原中学校 12 枚
- ・西小学校 3 枚
- ・坂城小学校 15 枚
- ・飯島中学校 4 枚
- ・岡田小学校 1 枚
- ・弥津小学校 4 枚
- ・諏訪地区 PTA 14 枚



(2) ウェルビーイング・ジュニアサミット

目的：本ジュニアサミットは、関東甲信越の同世代が一堂に会し「学校と地域の未来」について共に考え、語り合う場です。

私たちの暮らすまち、通う学校、そして関わる人々とのつながり（結）を見つめ直し、より良い未来を築くために、私たち自身が何ができるのかを主体的に考えることを目的としています。特に今回のサミットでは「ウェルビーイング」という視点を大切にしています。一人ひとりが心も体も豊かに、笑顔で毎日を過ごせることが、学校や地域の未来を明るくし、持続可能な社会へとつながっていきます。「笑顔が未来をつくる」——そんな思いを胸に、世代や地域を超えて意見を交わし合い、新しいアイデアや行動の一步をここから生み出していきます。

実施日時・参加数

■第1回目：令和7年7月26日（土） 9時～10時30分

参加校：11校 参加人数：24名

■第2回目：令和7年8月31日（日） 9時～10時30分

参加校：13校 参加人数：24名

ウェルビーイング・ジュニアサミット内容

① 自己紹介 10分(9:08)

お名前・学校名・学年・役職など、好きなこと又は好きな食べもの

② 学校紹介 15分(9:18)

③ 児童会・生徒会の活動のディスカッション 10分(9:33)

- ・スローガンの発表 スローガンの作成に関わった方は、作成に対する思いなど
- ・学校で頑張っていることやご自身の役職での活動の発表など

④ 「学校全体に“笑顔”があふれるには」のディスカッション 12分(9:43)

⑤ 「住んでいる地域に“笑顔”が広がるには」のディスカッション 12分(9:55)

⑥ 皆さんが考える理想の地域とは 10分(10:07)

⑥ 参加してみたの感想 8分(10:17)

【1回目の様子】



【2回目の様子】



(3) ながの大会 全体会

① 相互理解カード展示：令和7年10月19日（日） 全体会会場に展示

② パネルディスカッション

■10月19日全体会 9時～12時45分 会場：ホクト文化ホール

セッション1：パネルディスカッション (セッション1は9時40分～10時40分)

●趣旨：本大会のスローガン「結 笑顔で未来をつくる 子どもと一緒にウェルビーイングの実現を信州から」、メインテーマ「こどもまんなか ワクワクするPTA」を実現するため、子どもと大人が共に語り合う場として本パネルディスカッションを開催します

少子化や地域社会の変化が進む中、学校や地域の運営に子どもたち自身が主体的に関わり、その成長を大人が伴走しながら支えることが、これからの社会に必要不可欠です。また、子どもたちにとって「本気で関わってくれる素敵なお大人」との出会いは、未来への希望とチャレンジする力を育みます。

パネルディスカッションでは、ウェルビーイング・ジュニアサミットに参加した中学3年生3名と長野県教育委員会武田教育長、長野県PTA連合会城村会長をパネリストに迎え、子どもたちの視点と行政の視点を交えながら、「こどもまんなか」の教育・地域づくりの姿を探ります。コーディネーターは長野県PTA連合会実行委員会会長熊谷弘が務め、世代を超えた対話を通じて、PTA・学校・地域が一体となり、子どもたちと共に歩む未来のビジョン、ウェルビーイングの実現に向けての考えを共有します。

●テーマ：「子どもたちと地域のウェルビーイングの実現に向けて」

●パネリスト

武田育夫氏 長野県教育委員会教育長

城村義人 長野県PTA連合会会長

我孫子温樹君：あびこはるき 伊那東部中（上伊那）中学3年生 会長

佐藤凜聖君：さとうりんせい ★根羽学園（飯伊） 中学3年生 副会長

鳴澤宗一郎君：なるさわそういちろう 北御牧中（上小） 中学3年生 会長

※★トコトン認定校

コーディネーター：熊谷弘 ながの大会実行委員長・特別企画部 部長

●内 容：①オープニング映像+登壇者紹介

②趣旨説明（県Pの考え含めて）

③学校紹介、スローガンの発表と生徒会活動の特徴

長野県教育委員会の考え、信州教育について

長野県PTA連合会の方針、活動など

④学校を笑顔にするにはディスカッション

⑤地域を笑顔にするにはディスカッション

⑥まとめ

【パネルディスカッションの様子】



【参加者の意見】 根羽学園9年 佐藤 凜聖

僕は、このパネルディスカッションに参加できて、本当に良かったと感じました。その理由の一つとして、根羽学園で行っている活動を評価してもらい、多くの方に知ってもらえることができたからです。そして、規模の違う二つの学校と交流することで、僕の中でも大きな学びがありました。

また、この大会や他校の活動からも、僕はウェルビーイングを感じることができました。改めて、今回の大会に参加できて良かったと思います。ありがとうございました。(飯伊PTA 連合会広報紙より)

(4) 事業の振り返り・成果

第57回日本PTA関東ブロック研究大会で開催された特別企画に関して、特別企画部会での反省会を基にまとめたものとなります。会議では、中高生が意見を交わす「ジュニアサミット」や、学校と保護者の橋渡しとなる「相互理解カード」といった「こどもをまんなか」においた先進的な取り組みの成果が総括されています。当初は内容の難解さに戸惑っていた委員たちも、当日堂々と発表する生徒たちの成長を目の当たりにすることで、活動の深い意義とポテンシャルを再確認しました。一方で、教育現場への周知不足や運営スケジュールの過密さが今後の課題として挙げられており、この成功体験を次年度以降のPTA活動や地域活動へいかに継承するかという前向きな議論が多数出ました。特別企画の目的である大会スローガン・メインテーマの実現に大きく寄与した事業が開催できたと思います。

■事業総括報告書

ジュニアサミットと相互理解カードによる「こどもまんなか」教育の実現と意識変革の記録

1. はじめに：本事業の戦略的意義と「こどもまんなか」の理念

現代の教育環境および地域コミュニティにおいて、本事業が果たした役割は極めて大きい。我々が掲げた「こどもまんなか」という理念は、単なる情緒的なスローガンではなく、既存の教育パラダイムを根底から揺さぶる戦略的な指針である。従来の教育は、大人が良かれと判断した枠組みに子どもを適応させる「大人主導型」であったが、本事業ではそれを「子どもの視点」を起点とした共創型のアプローチへと転換することを目指した。

特筆すべきは、本事業が単なる思い付きの実験ではなく、実行委員長中心として長い歳月をかけて単一校や地域単位で磨き上げてきた「実証済みのメソッド」を、関東ブロックながの大会という広域スケールへと社会実装した点にある。この歴史的背景こそが、本事業に教育改革としての確かな重みと説得力を与えている。

本報告書では、当初の混迷がいかにして劇的な成功へと昇華したか、そのプロセスを構造的に分析し、次世代への指針として記録する。

2. 黎明期の葛藤：懐疑的視点から合意形成へのプロセス

新次元の価値を創造する際、そこには必ず「産みの苦しみ」としての摩擦が生じる。本事業の立ち上げ期は、まさにトップダウンの強烈なビジョンと、現場の困惑という「グラストーツの現実」が激突するフェーズであった。

企画部会のメンバーからは、「何をやるのか全く見えない」「無理難題だ」という切実な本音が漏れ、メンバー自らが冗談交じりに「被害者の会」を自称する事態となった。この心理的障壁の背景には、具体的な実施イメージの共有不足に加え、企画書に自分の名前が事前の合意なく記載されていたという「強制的参加」への戸惑いがあった。

しかし、この混乱は既存の PTA 活動という慣習を「脱構築（デコンストラクト）」するために必要なプロセスであった。リーダーの頭の中にあった 13 年来の成功イメージが、現場の抵抗というフィルターを通して、より強固な実施計画へと洗練されていったのである。この深い断絶を埋め、懐疑論を確信へと変えたのが、次章で述べる具体的な特別企画の事業展開であった。

3. 対話の設計：相互理解カードとジュニアサミットの機能的役割

抽象的な「こどもまんなか」の理念を具体的な熱量へと変換するため、我々は二つの事業を戦略的に接続した。「相互理解カード」というデータ収集フェーズと、「ジュニアサミット」という対話の表出フェーズである。

「相互理解カード」による認識の不一致の可視化

このツールは、大人と子供の間に関わる「善意の食い違い」を冷徹に可視化した。象徴的なのは「挨拶運動」に関する知見である。大人は「立ち止まって挨拶をすることが教育的に良い」と信じて疑わなかったが、カードを通じて得られた子供たちの本音は「(大人が集まって立っているのは) 実は怖い」という衝撃的なものであった。この「怖い」という一言は、大人の独善的な支援を、子どもの視点に立った本質的な協力へとアップデートさせる強力な触媒となった。

「相互理解カード」で得られたデータは、ジュニアサミットという「舞台」を通じて、初めて生きた対話へと昇華された。この「相互理解カード」は単なるイベントではなく、PTA と学校現場を「子どもの声を聴く」という共通目的で繋ぎ直すハブとして機能した。特に山ノ内町における学校統合の事例など、現実の課題解決にこれらのツールが活用された事実は、この設計が実効性を持つ仕組みであることを証明している。

4. 「ジュニアサミット」：生きた対話への転換

覚醒と成長：子供たちが示した圧倒的なポテンシャルの分析

サミット本番において、我々は子どもたちの圧倒的なポテンシャルを目の当たりにした。我孫子君、佐藤君、鳴澤君といった参加生徒たちは、短期間で「普通の中学生」から「社会を変える表現者」へと変貌を遂げた。

教育的見地から特筆すべきは、彼らの「プロフェッショナリズム」と「等身大の素顔」のコントラストである。控室では「俺の推しは誰々で、ライブにまで行った」と、いわゆる「推し活」や趣味の話に興じているごく普通の中学生たちが、ステージの照明を浴びた瞬間、数千人の大人を前に自らの意見を堂々と論理的に展開した。

この覚醒は、大人が真剣に「一人のパートナー」として子どもの声を聴く場を設計したことによる、心理的安全性の担保と承認の結果である。学校という閉じられた空間を超え、県外の仲間や大人と接続した「越境体験」は、彼らにとって一生の財産であり、自己効力感の源泉となる宝物となった。

5. 大人の意識変革：認識のズレの解消と「共創」への気づき

子どもたちの劇的な変貌は、運営側の大人たちに強烈な「反作用」をもたらした。当初、自身を「被害者」と称していたメンバーたちが、子どもの成長を目の当たりにすることで「やってよかった」という深い充足感に至るパラダイムシフトが起きたのである。

この変容の正体は、大人たちが抱いていた「子どもは守り、導く対象である」という無意識の過小評価に対する内省である。

1. 「子どものため」の再定義：子どもの意見を聞かずに語る「子供のため」がいかに危ういものであるかを、挨拶運動の事例などを通じて痛感した。
2. パートナーシップへの移行：子どもは大人が想像する以上に未来を洞察しており、対等な「社会の共創者」になり得るという気づき。

大人たちは、自分たちの役割が「指示」ではなく「環境の設計」「子どもたちの伴走者」にあることを学んだ。これはPTA活動の本質的なアップデートであり、地域教育における「共創」の土台が築かれた瞬間であった。

6. 事業の持続性と今後の展望：地域社会への長期的価値

本事業が示した成果は、一過性の熱狂で終わらせてはならない。今回関わった特別企画の部員の視点から言えば、これを「再現可能なシステム」として地域に定着させることが、真の社会デザインである。

○現状の課題と構造的慣性への対策

現在、学校現場や校長会との連携においては、依然として「教育現場の多忙さ」や「組織的な慣性」という高い壁が存在する。一部の熱意ある個人に依存するのではなく、マルチステークホルダー（教師、保護者、行政）が「こどもまんなか」の価値を共有するアライアンスを構築しなければならない。

○今後の具体的アプローチ

- * 小規模分散型の展開：郡市単位での小規模なジュニアサミットや相互理解ワークショップを推進し、草の根から成功体験を積み上げる。
- * デジタルとリアル融合：オンラインを積極的に活用し、地理的制約を超えた子ども同士の繋がりを定常化する。
- * 校長会との戦略的パートナーシップ：現場の負担感に配慮しつつ、山ノ内町のような成功事例を共有し、学校経営の一環として本メソッドを組み込む。

「結(ゆい)笑顔で未来をつくる～子どもと一緒にウェルビーイングの実現を信州から～」という大会スローガンとメインテーマ「こどもまんなか ワクワクする PTA 活動」のもと、子どもたちが自らの声で社会を動かせるという確信を持ち続けること。これこそが地域社会の持続可能性を高める唯一の道である。

国が掲げる第4次教育振興計画の2つのコンセプト「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を具現化する事業が、この信州からながの大会を通じて実施できたのではないかと思う。

最後になりますが、当初の混迷から今日に至るまで、数々の「無理難題」を共に乗り越えてくださった全メンバーに深く敬意を表します。皆様の葛藤と挑戦は、子どもたちの未来を照らす確かな光となりました。このバトンを次世代へと繋ぎ、子どもたちが主役となる社会を共に築き続けていきましょう。